

条幅部自由参考

12月15日正午必着

明石春浦先生書



開物成務(易)

物を開いて道理をさとらせ、これを事に施してその務を成就させる。

三浦士岳先生書



暮雨潮生(瓜歩)

春山樹繞(蕪城)

惆悵離舟(欲發)

江南煙寺鐘聲(高青邱)

朝鳥あさどりの 声こゑなくきけば 檉かしの葉はも 川原かはらもなべて 霜しもしろきかな (土屋 文明)

寧知塵外意 定後更成吟  
夜静溪声近 庭寒月色深  
遙知大小朗 已断去來心

本意 宿東林に 因聽子賤琴  
本意 意う 東林に宿せんことを 因りて子賤が琴を聴く  
遙かに知る 大小朗の 已に去來の心を断つを  
夜静かにして 溪声近く 庭寒うして 月色深し  
寧ぞ知らん 塵外の意 定後 更に吟を成さんとは

酬普選二上人 (嚴 維)

雲散烟飛岫亦枯 (袁宏道)  
寒砧萬戸月如レ水  
塞雁一聲霜滿レ天 (薩都刺)

雲散じ 烟飛び 岫亦た枯る。  
岫は山峰。雲烟ともに散じて峰は枯れ瘦せた姿をあらわしている。  
寒砧 万戸月の如く  
月光も水の如く淡い夜、あちこちからきぬたの音が聞え、国境  
の方から渡って来る雁の音が霜気満ちた空に短かく聞える。  
塞雁 一声霜天に満つ。

普・選二上人に酬ゆ

嚴 維

### 条幅部創作課題

四種の詩文から一種を選択して出品のこと。

天寒日短烏鴉啼、江空野潤黃雲低 (薩都刺)

暮れやすい寒空に烏がなき、舟一つない川  
人影もない野に夕暮の雲が低くたれている。



明石幸子書

半紙部規定課題A

12月15日正午必着

客 青 静  
院 衣  
禪

※作品には必ず落款を入れてください。

明石春浦先生書

※課題A(楷書)と課題B(四体の中より一書体選択)の二点を出品のこと。

半紙部規定課題B

12月15日正午必着

行書



隸書



明石春浦先生書

草書



行草書



美玉を抱きながら（才能を有しながら）、この京城繁華の地で涙にくれる 故郷の山々は、帰り行く道程があまりに遠い  
静けさは禅僧の房に傍うてただよい 奥深さは庶民の家のよう  
林に日は暮れて、鳥たちはねぐらの木を争い 庭に春が訪れ、蝶は花を守護するかのよう  
東の城門の所には空き地がある 誰がかの邵平に倣って瓜を種えるだろう

下第寓「居崇聖寺」 許渾

懷玉泣京華

舊山歸路賒

静依禪客院

幽學野人家

林晚鳥爭樹

園春蝶護花

東門有閑地

誰種邵平瓜

下第して崇聖寺に寓居す

許渾

玉を懷いて 京華に泣く

旧山 帰路賒かなり

静は禅客の院に依り

幽は野人の家を学ぶ

林は晩れて 鳥は樹を争い

園は春にして 蝶は花を護る

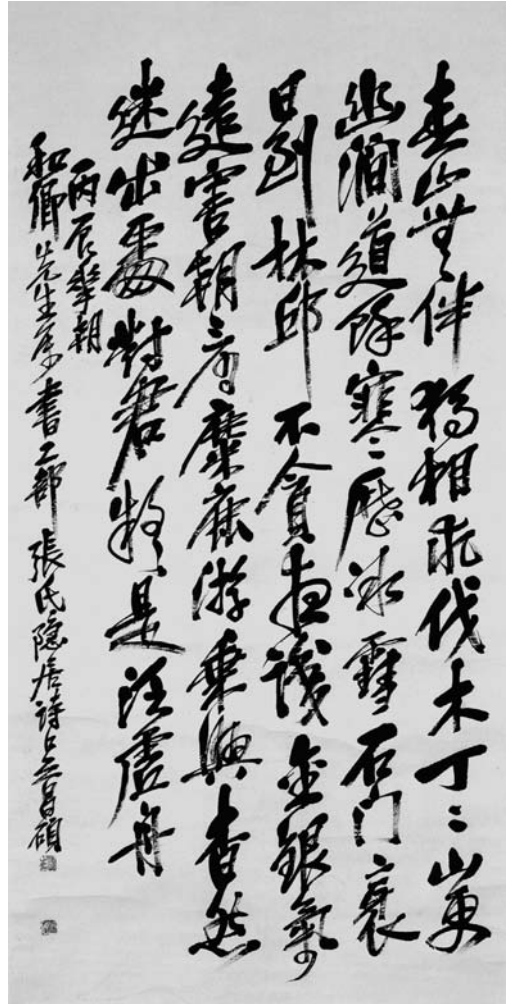
東門に閑地有り

誰か邵平の瓜を種えん

12月15日正午必着



害より遠ざかりて 朝に麋鹿の(遊ぶを) 見る



西 墨濤先生臨書

清 吳昌碩・杜甫七律行書幅

春山無伴獨相求 春山 伴無く 独り相い求む  
 伐木丁丁山更幽 伐木 丁々として 山更に幽なり  
 澗道餘寒歷冰雪 澗道の余寒 氷雪を歴て  
 石門斜日到林邱 石門の斜日 林邱に到る  
 不貪夜識金銀氣 貪らずして 夜に金銀の氣を識り  
 遠害朝看麋鹿游 害より遠ざかりて 朝に麋鹿の游ぶを見る  
 乘興杳然迷出處 興に乗じ杳然として 出處に迷う  
 對君疑是泛虛舟 君に對すれば 疑うらくは是れ虚舟を泛ぶるか

(丙辰華朝 和卿先生属、書工部張氏隱居詩、吳昌碩)

和卿先生属し、工部の張氏隱居詩を書す、吳昌碩

吳昌碩は清朝の道光二十四年に浙江省安吉県に生まれ、中華民国一六年に上海で没した。(一八四四〜一九二七・享年八十四歳)名は俊、長じて俊卿といい、字は昌碩、倉碩・蒼石・缶廬・苦鐵・老蒼などと号した。  
 清末から中華民国の初期は大動乱の時代で、十七歳の時に太平天国革命の争乱が郷里に及び、一家は離散した。彼は難を逃れてひとり湖北省・安徽省などを五年間流亡した。二十一歳の時にようやく故郷にたどりつき、年老いた父と再会し、一緒に百姓をして生計をたてていた。

吳昌碩は、若いときから仕官の道にはまったく興味を示さず、ひたすら文学、芸術に打ち込んでいた。二十九歳の時故郷を離れ、杭州・蘇州・上海と遊歴し、文学を齎に学び、書を楊峴に、画を任頤に学んだ。一九〇四年に金石書画の研究団体として西泠印社が設立され、彼は推されて初代社長に就任した。久しく蘇州に住み、晩年には上海に定住し、文墨活動に励んだ。篆刻は十代から始め、書は中年以降晩年まで石鼓文の臨摹に没頭したが、王鐸や米元章を習ったといわれる行草書にも篆書の用筆法をとり入れた独自の直線的なスタイルを作り上げていった。この行書幅は吳昌碩七十三歳の作。

(春濤)

12月15日正午必着

高天原日別林耶 不負此後 金銀氣  
 遠害胡有 棄疾游乘興 杳然迷出  
 處 對君於 是 汪虛舟。臨口

△做書參考▽

※この釈文での臨書部門の出品は出来ません。

清晨 金年初 日契 高林曲 任遠遊  
 度禪 秀松木 深 山光 悅鳥性 潭影空 人心  
 萬籟 此俱寂 惟聞 鐘磬音。書口

清晨 入古寺  
 山光 悅鳥性

初日照高林  
 潭影空人心

曲徑通幽處  
 萬籟此俱寂

禪房花木深  
 惟聞鐘磬音

(常建)

12月15日正午必着

教育部毛筆



だん ろ  
暖 炉

中学一年

雨宮春聲先生書



せい や  
聖 夜

中学二三年

菅井松雲先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



はく

さい

小学五年

藤井良泰先生書



や

けい

小学六年

森戸春濤書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



12月15日正午必着



ふゆ  
冬

やま  
山

小学三年

細谷春誠先生書



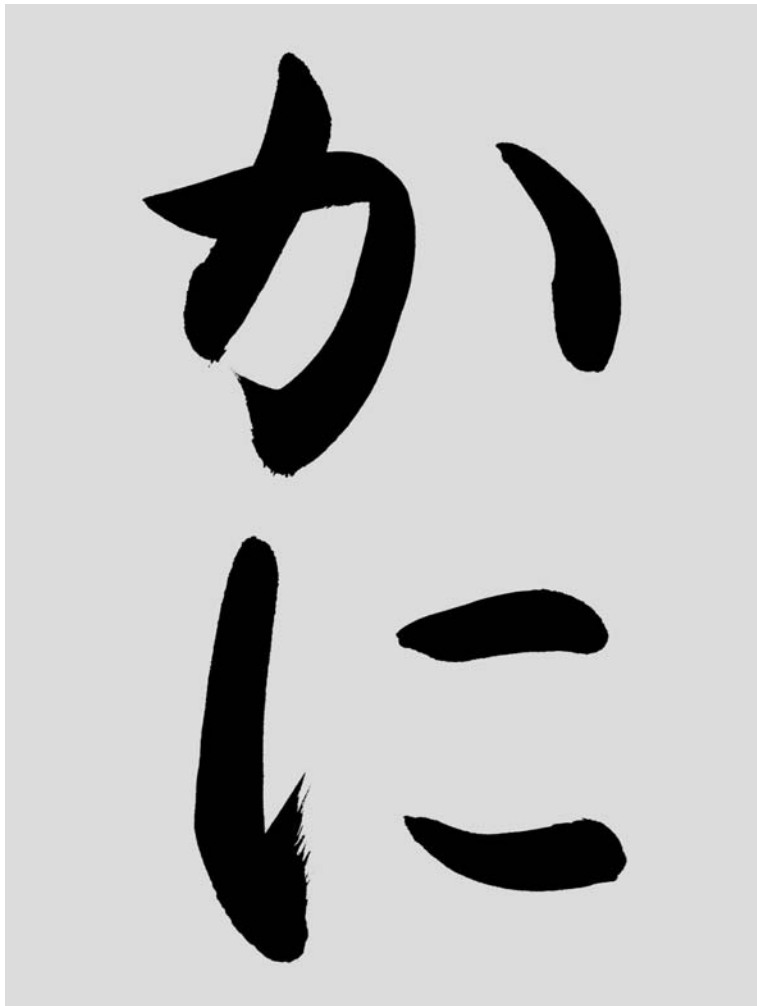
きた  
北

かぜ  
風

小学四年

榎戸春龍先生書

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。



明石幸子書

か に 小学一年・幼年



藤田幸春先生書

十<sup>じゅう</sup> 二<sup>に</sup> 小学二年

※作品には必ず学年と氏名を毛筆で記入してください。

スマスケーキを作る	小麦粉を使ってクリ
-----------	-----------

小学五年

雄大な雪原をトナ	カイの群れが走る
----------	----------

小学六年

るかれ野かな虚子	遠山に日の当たりた
----------	-----------

中学

る落葉のなみ木道	冬の気配を感じさせ
----------	-----------

一般(級位)

のねもすがらなる月明りかな	着るまでして庭は冬木のこがらしの夜もすがらなる月明りかな
---------------	------------------------------

一般(段位)

落葉して庭は冬木のこがらしの夜もすがらなる月明りかな (太田水穂)

明石幸子書

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

か	つ
お	め
を	た
	い
あ	み
ら	ず
う	で

幼年

か	字
き	は
ま	て
し	い
よ	ね
う	い
	に

小学一年

ひ	魚
る	を
の	食
お	べ
や	る
こ	
	あ

小学二年

て	か
銀	れ
色	草
に	が
な	こ
っ	お
た	っ

小学三年

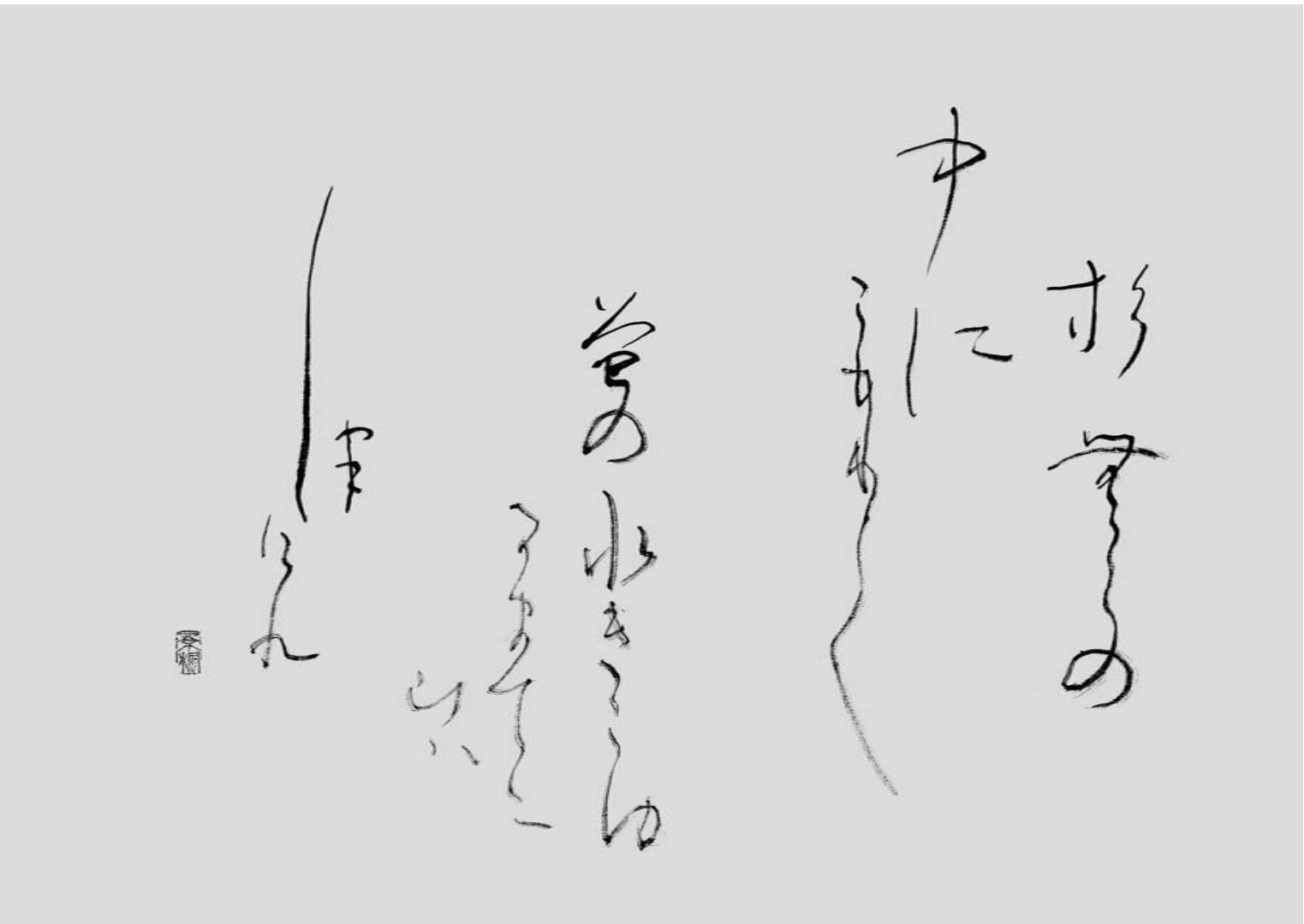
海	流
を	氷
う	が
め	や
つ	っ
く	て
し	来
た	て

小学四年

※出品には玄和硬筆用紙を使用し幼年・小学は鉛筆 中学・一般はペンまたはサインペンで書くこと。  
また、作品には必ず学年と氏名を記入してください。消しゴムを使用した作品は出品には適しません。

半紙部かな参考

12月15日正午必着



岩本景楓先生書

杉<sup>無</sup>のすきこゆるまで山はしづけく (齊藤茂吉)

1月新年号予告

一般半紙部規定

許渾『下第寓居崇聖寺』から「幽學野人家」

条幅部・半紙部臨書課題「北魏・魏靈藏薛法紹造像記」

早い

小学二年

初雪

小学四年

新春

小学六年

慶雲

中学二・三年

ふじ

小学一年・幼年

和光

小学三年

箱根

小学五年

参賀

中学一年

真綿のような雪が  
里山をつつんでいる

小学五年

雪の結しように朝日が  
あたり輝きはじめる

小学六年

茶の花にうめの古  
木を愛すかな子規

中学

寒々とした川の流れば  
清らかに月影をうつす

ペン字(級位)

雪の上を流る霧や海わら  
しをたはし海をえうを是舟

ペン字(段位)

ゆめまにのまつた  
た

幼年

しむろくうのみえまが  
す

小学一年

に冬の山はゆき  
た

小学二年

を元日ともいう  
こと

小学三年

雪がふって坂みちは  
スキー場に早がわり

小学四年

※十二月の競書の締切は十五日(日)です。厳守の程よろしくお願い致します。